ミャンマーの交通事情

1．はじめに

経済成長著しいミャンマー。インド、中国、そしてASEAN諸国に囲まれたこの国は、日本企業のみならず、世界中の企業からの注目を集めています。しかし、ミャンマーと接点を持ったことがある読者は、それほど多くないのではないでしょうか。というのも、ミャンマーでは知的財産制度が確立されていません 。日本企業や日系法律事務所の進出も進んでいるようですが、こと知財の世界では「未知の国」といわざるを得ない状況にあります。

〈ミャンマー全図〉 ©Google

民主化の途上にあることで、生活水準は高くないというイメージを持たれている読者も少なくないでしょう。私もその中の一人であったわけですが、実際にミャンマーを訪問してみると、そこには驚きの世界が広がっていました。本稿では、その中から、ミャンマーの交通事情についてご紹介します。

2．カードが挿入されていません

「カードが挿入されていません」。ヤンゴン国際空港で手配したタクシーのエンジンがかかった瞬間、車内に鳴り響いた第一声です。車をお持ちの方はお分かりだと思います。これは、ETCカードリーダの自動音声（ETCカードリーダにETCカードが挿入されていないことを警告するもの）です。どうやら、手配したタクシーがETCカードリーダを搭載したままの日本の中古車だったようです。実は、ミャンマーでは、日本の中古車が大人気。私の感覚では、道を走る車の半分以上（８割近く）が日本の中古車です。中には、

〈ヤンゴン市内の路線バスとして現役を続ける日本のスクールバス〉

本の商用車（屋号の表示「□□工務店」が残っているもの）や高校のスクールバスも走っています。もちろん、彼らは日本語の音声や表記の意味を理解していません。

3．自動車天国

昨年、ベトナムのハノイを訪問したときには、バイクの多さに目を奪われました。その９割以上が日本製だったことも印象的でした。ミャンマーもベトナムと同じASEANの新興国。ベトナムで見た景色を脳裏に浮かべながら市内に出てみると、予想に反する光景が広がっていました。

ヤンゴンでは、バイクが走っていません。これは、一般人のバイク利用が制限されているためだそうです 。渋滞時を除けば、バイクがいない分、自動車は結構な速度で走ることができます。

一方、ネピドーでは、ハノイほどではないものの、バイクも見かけます。しかし、その大半は中国製。バイクのユーザ層の給与水準では、自動車はおろか、中古の日本製バイクにも手が出ないそうです。

4．待たれる鉄道

ヤンゴンは、慢性的な渋滞に悩まされています。渋滞に巻き込まれたときに周りを見渡すと日本車だらけ。自分がどこにいるのかわからなくなる程です。鉄道もありますが、運行が不安定なようで、主要な交通手段にはなり切れていません。ヤンゴン市内に日本の鉄道を導入すれば、渋滞の解消に一役買うことでしょう。

また、ネピドーには、多くの行政機関（科学技術省 を含む）のオフィスがあり、大勢の公務員が居住しています。しかし、彼らの大半はヤンゴンから転勤してきた人たち。週末になると、ヤンゴンに戻って家族や友人と過ごしているようです。そんな彼らにとって欠かせないのが高速バス。ヤンゴン・ネピドー間の移動は、飛行機なら１時間程度ですが、高速バスでは５時間。しかし、高速バスなら、飛行機の半分以下の料金で移動できるようです。現地で会ったミャンマー人の友人も「高速バスは快適だ」といってネピドーを夜中に出る高速バスに乗り込んでいましたが、聞くだけでハードな生活です。ヤンゴン・ネピドー間を結ぶ新幹線は、彼らにの移動をより快適なものにするでしょう。

世界に誇れるMade in Japanの出番がありそうです。

5．むすび

日本政府は、様々なルートでミャンマーへの開発援助を行っています。街中で日本企業の製品や看板を目にすることも珍しくありません。もちろん、日本特許庁が支援している知財制度構築の動きからも目が離せません。

〈ヤンゴン中心部を走る自動車〉

編集者紹介

木本大介（きもと・だいすけ）

日本弁理士、グローバル・アイピー東京特許業務法人所属。
1977年神奈川県生まれ。2003年上智大学大学院理工学研究科電気電子工学修了。専門は通信、エレクトロニクス及びコンピュータソフトウェア。2005年弁理士試験合格。企業（知財部）３年、特許事務所７年の経験を経て、新興国における日本企業の知財活動をサポートしたいとの思いから2013年７月より現職。趣味はゴルフ。好きな言葉は「人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力」（稲盛和夫（2012）『生き方』より）。
http://www.giplaw-tokyo.co.jp/jp/